＜小特集＞

「経済社会学を切り拓く」
福井康貴氏の『歴史のなかの大卒労働市場
――就職・採用の経済社会学』を読む

Exploring Economic Sociology
Yasutaka Fukui,Labor Market Entry in Historical Perspective: Economic Sociology of Job Search and Hiring of New University Graduates in Japan

企画責任者　相澤　真一
Shinichi AIZAWA
中京大学現代社会学部准教授

社会学の研究の隆盛において、国際的には盛んに研究が行われているにもかかわらず、日本ではあまり研究が行われていない分野もあれば、その逆もある。経済社会学は、前者の典型例で、海外では新しい社会学理論を産み出している分野であるにもかかわらず、日本では、研究が多いとは言い難い分野である。

21世紀になってからの日本の社会学が、格差社会論を牽引する立場で実証的なデータをさまざまに提示してきたことが一つの大きな功績となってきた。一方で、では、日本の社会学が、経済発展と社会の関係や、社会における市場関係と他の社会関係の考察に充分に目を向けてきたか、と問われると、自信のある回答はおそらくできないであろう。例えば、2018年5月に出版された対談書『そろそろ左派は＜経済＞を語ろう』（亜紀書房）は、平等や再分配を語る側だった左派が、経済成長について語ることができていない現状を裏返しにしたものと言える。左派という表現をある種の学問に代表させることは大きな躊躇があるものの、「社会」という認識に着目してきた社会学は、市場や経済を理解しているようで、理解していない。特に、日本の社会学は市場や経済を理解していない、という前提に立った方が良い現状には

変わりはない[1]。

一方で、日本の社会学が市場や経済を理解し、語れるようになることの意義は大きいと考えられる。ミラノヴィッチの「エレファントカーブ」の図において、「最大の負け組」である「豊かな世界の下位中間層」（Milanovic 2016=2017: 15）に人口の大部分の層を抱える日本が、新しい社会の経済の発展のあり方についてどう示せるかは、グローバル化した世界に対しても多くの示唆を含むであろう。逆に、経済事象の実証分析において、既に計量経済学の確固たる優位性が存在する昨今、理論面において、市場や経済的交換関係についての豊かな理論を産み出していき、経済学とは異なる観点から経済事象についての社会学的知見を産み出していかなければ、社会科学のなかでの社会学の立場は一層不利なものとなっていくであろう。以上の観点から見た場合、経済社会学は、今後、日本の社会学でも重要な分野となっていく可能性がある。

このように、経済事象をいかに社会学から分析するか、という問いの重要性に逸早く気づいた優れた作品こそが、今回この小特集で取り上げる福井康貴氏の著作『歴史のなかの大卒労働市場――就職・採用の経済社会学』である。本書は、新規大卒労働市場という市場を、歴史的関心のみならず、経済社会学的な理論的関心から解読を行っている。この福井氏が 2017 年度より名古屋大学に赴任され、本学教員と多くの接点を得るようになったことが本書を取り上げるきっかけとなった。特に、研究科の構成員の一人である大岡頼光が 10 年来、名古屋大学の教員の方々と実施している「社会政治研究会」にて福井氏が発表を行い、その後に、経済社会学への研究展開の考えを伺ったことが今回の研究会を行う直接のきっかけとなった。

この書評研究会は、2018 年 3 月 20 日に中京大学豊田キャンパスにて行われた。当日の評者は、企画責任者である私と堀兼大朗（中京大学非常勤講師）が務めた。年度末押し迫った時期で参加者数には恵まれなかったものの、2017 年度の研究科主任の岡部真由美も含め、濃密な議論が行われた。この

---

[1] もちろん、日本社会の外に目を向けてきた国際開発研究のなかに、開発社会学の分野があり、この分野の研究が経済開発・社会開発をどのように社会学的に読み解いてきたか、という点の蓄積があることは承知している（例えば、佐藤ほか 2015 など）。逆に言えば、このような海外に目を向けてきた地域研究としての社会学と日本社会の研究とがある種の断絶を抱えていることも見逃せない事態と言えるのかもしれない。

小特集は、その時に提示された書評のレジュメと当日のリプライを基に双方が加筆したものである。

詳細な要約は、堀の書評１に譲るとして、読者の配慮のために、本書の概要を簡単に紹介しよう。本書は、明治期の大卒労働市場の形成期から平成前半の就職協定の廃止までを歴史の視野に入れて、「求人・求職活動とそれを制約する制度･埋め込みへの照準」（本書７頁）が戦略として採用されている。当日の議論を踏まえて紹介すると、「いい企業に入りたい」という大学生と「いい人を採りたい」という企業の間で、交換関係としての市場が存在している。この市場のなかでは、大学生には、それぞれの企業がどのようなものかわからないし、企業の側は学生の能力がわからず推定するしかないという情報の非対称性が存在している。この情報の非対称性のなかで、「人物試験」、学歴、面接といった評価基準やタイミングがどうやって制約されてきたのかについて、どのように両者の側で意味づけられているかを歴史資料をもって解読していく。この点で、市場の機能を解釈として読み取っていくという意味でも極めてチャレンジングな社会学的考察を含んでいる。

堀による書評１では、要約の後に、経済社会学による説明枠組の基本概念について、主に質問が提示されている。一方、企画責任者の相澤による書評2では、主に２点の論点として、経済社会学としての実証のあり方および近現代日本というフィールドの叙述の仕方に関する疑問が提示されている。堀、相澤いずれの書評も経済社会学に対する理解の不十分さとそれによる本書解読の拙さを示す箇所が散見されたものの、福井氏からは極めて丁寧なリプライを頂いた。それのみならず、このリプライがこれからの経済社会学における思考方法や福井氏ご自身の今後の研究構想としても大変興味深い記述となっている。この小さな特集がタイトルにも示したように、「経済社会学を切り拓く」ための一つのきっかけとなれば、企画責任者としても大変喜ばしい。今後さらなる研究の発展を願ってやまない。

［文献］

佐藤寛・浜本篤史・佐野麻由子・滝村卓司，2015，『開発社会学を学ぶための 60 冊――援助と発展を根本から考えよう』明石書店。

ブランコ・ミラノヴィッチ著・立木勝訳『大不平等：エレファントカーブが予測する未来』.